

61

日本医科大学の前身済生学舎を創設した 長谷川泰の思想的系譜

——良寛の反骨精神に学ぶ——

殿崎 正明, 山本 鼎

日本医科大学 医史学研究会

はじめに 長谷川泰(以下泰)は少年期14歳から17歳の3年間、良寛と交流のあった鈴木文台の漢学塾「長善館」で漢学や良寛の「あわれみの心」を学び受け継いでいたので後に済恤(あわれみの心)、済生救民、「自分のためにではなく、他人のために生きる」というフーフェランドの医戒で述べられている事を実践し得たと推察される。多くの日本人、特に越後人は地元の出身である良寛を尊敬している。あの河井継之助も上杉謙信と同時に良寛を尊敬していた。そして泰も「智謀を謙信に学び、果断を河井継之助に倣い、智慧遇痴通般若底の三昧を、僧良寛に会得したりしとすれば、是れ繁特が痴に倣いて、文珠の賢に到達せるなり」と晩年の泰を知る佐藤独嘯が述べている様に、良寛の生き方を人生の手本としていた事について述べる。

泰の精神 済生学舎は、フーフェランドが「医戒」の中で説く貧しい人々を病から救済することを実践しようとした順天堂における師佐藤尚中の精神を泰が受け継ぎ開校したもので、貧しくしてその上病気で苦しむ人々を救うのが医師の最も大切な道であるという「済生救民」を校是とし、東京府病院長として泰は「患者に対し済恤(憐れみ)の心を持って診察して下さい」と書き残し、自ら「貧しい人々を無料で入院させてほしい」という願書を年に120通以上東京府知事宛に書き送り、その思想を実践している。この思想は、直接的には佐倉順天堂でのフーフェランドの教科書を使った佐藤尚中による教育に求められるが、それを受け入れる事の出来た泰の精神は少年期にあわれみの心を持って人々と接してきた良寛と交流のあった鈴木文台の教育によってその土壌が培われていたものと思われる。

良寛 地元の由緒ある名家の生まれであった良寛は、18歳頃に名主見習いをし、町役人と漁民との間の係争の調停等で町政の現実を経験し、名主職と自分の資質とはなじまないことを知り、また盗賊が死刑に処される場面に役目上立会って無常を感じたのか、帰宅したその日に出家したという。

良寛の思想 良寛は藩主の政治向きや出雲崎を直接統治する徳川幕府に対して終生異常なまでに細かい神経を使い自らを韜晦(身を隠す)して生き、万葉集二十卷四千五百余首の中から約二百首を選び出して『秋の野』と題した良寛自筆の稿本の中に天皇讃歌の一つも採用していない。尊王とか反幕思想に基づく言論が命の危険性に繋がった時代で、尊王思想そのものが当時としては革新的な思想であった。その証拠に良寛の没後身を寄せていた木村家の当主元右衛門は出雲崎代官所から敵命があり、良寛の遺稿の全てを代官所に持参させられ三昼夜にわたる検閲を受けている。良寛は幕府のブラック・リストにマークされていた人であるがその生前は幕府も手を出せなかったのである。

泰と良寛の反骨の精神 良寛が徹底的に幕府から韜晦して一生を終えた様に、泰もまた政府の目から韜晦して生きた。北越戊辰戦争後親類縁者に迷惑の及ばぬ様に故郷と縁を切って上京している事や河井継之助の事に触れた文章を一行も残していない点、特に明治42年泰が存命中に出版された今泉澤次郎著『河井継之助伝』の序文には執筆にあたり直接間接に助力を得た人57名中一番目に旧藩主牧野子爵、二番目の河井継之助と慈眼寺で談判した岩村精一郎に続き三番目に泰の名前が出ているが、本文には泰の名は一箇所も認めることが出来ない。恐らく河井継之助が負傷して八十里を越え只見村に入り、幕臣松本良順に来診して貰うも眠るが如く亡くなるまでの病状、経過の描写等の確認に協力されたものと推察される。良寛がその反骨精神を第三者に決して見破られるような行為或いは文章を残さずその生涯を全うしたのに対し、泰は「天下に三賊あり、華族に、官吏に、銀行の頭取」と特に文部官僚批判を事ある毎に行い、官僚の黒幕である山県有朋の執念深い厭悪により済生学舎を廃校に追い遣られるという運命を辿る事となった。